1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4091100018
法人名	株式会社長英会
事業所名	ふくよかの家、大平寺
所在地	福岡県福岡市南区大平寺2-13-30
自己評価作成日	令和4年1月6日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/40/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	株式会社 アーバン・マトリックス 福祉評価センター		
所在地	福岡県北九州市戸畑区境川一丁目7番6号		
訪問調査日	令和4年2月17日	評価結果確定日	令和4年3月10日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

施設は、クリニック・介護付有料老人ホーム・ショートステイ・デイサービス・グループホームで構成され、総合的な地域福祉拠点となっている。見晴らしの良い屋上やメインガーデンにて散歩やBBQを楽しめる。スプリンクラーや自動火災報知器、地震対策の棚、クッション性のある床材でリスク軽減や快適な生活の為の設備の充実がある。また、ロビーには自動販売機・コーヒーマシン・給茶機・売店や外部からのヤクルト・お菓子・洋服販売等もあり、「昭和」をコンセプトに造られた内装は、大きな黒い柱に漆喰調の壁、障子等が、古き良き時代の落ち着いた雰囲気を生み出している。毎月行なわれている様々なイベントは入居者・家族・職員・地域の方々と共に楽しむ機会となっている。ホームの運営にあたっては家庭的な雰囲気の中で職員と共に支えあいながら生活すること、入居者それぞれが主人公となって自分の持てる力を大切に個々の希望に副った、あるがままの生活を実現することを支援している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

医療機関や介護付有料老人ホーム、短期入所生活介護、通所介護が同一敷地内にある複合型施設の中に「グループホーム ふくよかの家、大平寺」は開設されている。自然に囲まれた高台に立地している。敷地が広く季節ごとに様々な木々や花が咲いて、四季折々の風景を味わう事が出来る。コロナ禍であっても、敷地内で散歩をしたり景色を鑑賞できる環境である。コロナ禍以前は、地域の行事に参加をしたり事業所に地域の方々を呼んで交流をしていた。同一敷地内には医療機関があるため、医療的なバックアップもあり、医療との連携が図りやすく看取り対応も実施している。今後も地域との繋がりを大切にしながら、地域の中の事業所として期待できる事業所である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
58	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:25,26,27)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	65	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています (参考項目:9,10,21)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
59	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:20,40)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	66	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,22)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
60	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:40)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
61	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:38,39)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:51)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
63	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:32,33)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	70	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
64	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:30)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

自己評価および外部評価結果					
自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	毎朝の朝礼時に職員が理念を唱和し、職員への理念の浸透を図ると共に理念を実践するための心構えについても定め、職員全員で共通した支援が提供できるように取り組んでいる。訪問客や家族の方にも理念を説明し理解を育んでいる。	理念については、毎日の朝礼時に職員全員で唱和を実施している。また事業所内に理念を掲示することで、職員に少しでも理念が浸透する様にしている。「法人の理念及び職員としての姿勢」との表題で、理念に関する研修も実施している。入居契約の際に利用者や利用者家族に理念をお渡しし説明をしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	新型コロナウイルス感染症拡大予防対策のため令和2年3月から一時中止の状況。通常なら日常生活で地域の方々が施設を利用したり行事案内を配布しイベント・行事へ参加をしてもらったり学生の職場体験の受入れや町内行事の参加や、子供神輿の慰問、新年会・敬老会等の行事にも事業所の代表が参加し交流場を持つことで事業所と地域の情報交換や連携を図っていた。	コロナ禍以前は、地域の行事(子供神輿、町内会のイベント)に参加をしたり、地域の方々が事業所で開催するバザーや行事に参加をしていたが、現在はコロナ禍で実施出来ていない。コロナ禍では、事業所や関連事業所で作成をしている「ふくよか通信」を地域の代表者や地域の会合の際、お渡ししている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	新型コロナウイルス感染症拡大予防対策のため令和2年3月から一時中止の状況。月毎の行事の場に、近隣のご家族が参加され、職員による接し方や介助方法を見ていただき、助言をさせていただくことや、ご家族からの相談に乗ることもしていた。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	新型コロナウイルス感染症拡大予防対策のため令和2年3月から一時中止の状況。運営推進会議は概ね定期的に2ヶ月に1回開催し、本人・家族・地域の方々等も参加し、地域との交流やホームの運営・現状などを話し合い、サービスの質の向上に努めていた。現在は、電話や郵便物やアクリル板越し面会時に個別に実施する。	コロナ禍であるため、書面開催をしている。書面開催の会議録は地域包括支援センターにお渡しする事もある。書面開催した内容を毎月発行している「ふくよか通信」に掲載して、毎月の請求書と一緒に郵送している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市の担当職員とは入居者に必要な情報収集や運営についての指導を得ることがサービスの質の向上に繋がるので、出来る限り連携を高めていきたいと考えている。	コロナウイルスの助成金の相談、感染状況の情報や感染予防の情報共有の件で市町村と連携を図っている。おむつ給付サービスを利用されている方がおり、介護保険更新の時期には、市町村の窓口介護保険の代行申請をしている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束のマニュアルを整備し、職員への内容の周知徹底を図っている。他のフロアへのドアは施錠をしていない。事業所として、身体拘束をしないケアへの取り組みを行なっている。	事業所として「身体拘束廃止に関する指針」を作成しており、身体拘束廃止委員会が設置されている。身体拘束廃止に関する研修は、年4回実施している。現在、身体拘束をしている利用者はいない。センサーを利用されている利用者があり、利用に関してはケアプランに記載している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	高齢者虐待防止関連法の資料を整備し、職員への内容の周知徹底を図っており、虐待が発生しないよう注意を払って、施設内研修なども活用している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	(6)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護に関する資料については施設内に設置しており、自由に閲覧出来るようにしている。併設の施設で成年後見制度を利用されている方があったため、必要な場合は、その事例から学び、サポート出来るように取り組みたいと考えている。	成年後見制度や日常生活自立支援事業の事について質問があった際に、回答が出来る様に事業所内にパンフレットを設置している。権利擁護に関する研修を年1回実施している。研修に参加出来なかった職員は、回覧研修を実施して資料を配布している。	
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を得ている。		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者には、定期的に生活に対する意向の聞き取りを行い、意向を運営に反映させている。家族に対しては、ご意見箱を玄関に設置しているが、特に目立った内容は見受けられない。家族の面会時や、計画作成担当者が計画更新をする時に意見や要望を聞き取り、改善策を検討し、運営に反映していくように努めている。	玄関には目安箱を設置して、意見がある際はいつでも投函出来る様にしている。ケアプランの更新時に計画作成担当者から家族に電話をして、意見をお聴きしている。家族から面会回数を増やして欲しいと要望もあり、オンライン面会を実施したり、窓越し面会を実施したりなど、家族の意見を取り入れている。	
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	定期的にミーティングとケアカンファレンスを実施しており、職員からの運営に関する意見や提案を聞き、運営に反映させている。	スタッフミーティングを月1回開催したり、職員面談が年1回実施されている。職員面談は基本的には管理者が対応しているが、職員の意見の内容によっては施設長が対応する事もある。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は、個々の努力や実績、勤務状況等を勘案し、各自が向上心を持って働けるような職場環境・条件の整備に努めている。		
13	(9)	○人権の尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集・採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようにしている。また事業所で働く職員についても、その能力を發揮して生き生きとして勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保証されるよう配慮している	採用については特に条件は無いが、施設としては高齢者に対する温かい思いのある人が望ましいと考えている。職員に対してはシフトの変更等で勤務時間を柔軟に調整している。また、本人の努力が報われるよう、個々の勤務状態に応じて、職員の能力を公平に評価している。	職員の採用については性別や年齢、経験等を条件としていない。職員の中には手先が器用な職員がいて、利用者と一緒に手芸をしたり花や作物を育てたりを一緒にしている。コロナ禍以前は、法人で介護職員初任者研修を開催して、職員が受講しやすい様にしていた。	
14	(10)	○人権教育・啓発活動 法人代表者及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる	人権尊重については、理念の基本中の基本であるので、言葉遣いや振る舞いについて入居者に対してだけでなく、日頃から職員間でも注意合っている。身体拘束や虐待等の人権教育については教育委員会の勉強会を活用し、今後も活動を充実していく予定である。	高齢者虐待防止と人権擁護の研修を定期的実施しており、年間計画の中で研修が位置づけられている。人権教育に関しては、高齢者虐待防止や身体拘束廃止とも密接に関係があるため、それらの研修と同時に実施する事もある。人権に関しての研修は年1回以上開催している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
15		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人による教育委員会を設置し、委員が作成した計画に基づいて内部研修を行なっている。外部研修は、新型コロナウイルス感染症拡大予防対策のため令和2年3月から一時中止の状況。		
16		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	地域の職場見学・交流に参加し、互いの理解を深められるようにしている。今後も職員同士の交流も含め、同業者とのネットワーク化に努めていきたいと考えている。新型コロナウイルス感染症拡大予防対策のため令和2年3月から一時中止の状況。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
17		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居契約の段階で、家族や本人からの聞き取りを実施し、要望が満たされるよう施設サービス計画書に具体的なサービス内容を記載している。入居直後は、不安なことや困っていることが無いが、本人からの聞き取りや様子観察を充分に行なっている。		
18		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居契約の段階で、家族や本人からの聞き取りを実施し、困っていることや不安なこと、要望等に耳を傾けて、信頼関係を築けるよう、関係作りに努めている。		
19		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居前に、利用者のニーズに応じ、ショートステイやデイサービスの利用をお勧めしている。そのことで施設の雰囲気慣れ、職員との馴染みの関係が出来ることで、入居に伴う環境の変化による混乱を極力和らげることが出来るよう配慮している。		
20		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員は常に「してあげる…」という意識ではなく、理念に掲げているように入居者と一緒に楽しむように心がけている。また、その人の持てる力を発揮してもらう為に、「生活史シート」等を活用し、一人ひとりの得意分野や興味などを把握し、一方的に介護する側ではなく、入居者の能力が発揮できるように働きかけて、「○○だから～」を少なくなるように心がけている。		
21		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	職員は、家族への情報提供及び、希望の聞き取りを随時実施しており、家族が望む本人の生活の継続を家族と共に支援していけるよう関係を築いている。		
22	(11)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人の馴染みの場所を通るドライブの実施、馴染みの人が来所された際に一緒に居室で過ごしていただけるような配慮等の支援を行なっているが、新型コロナウイルス感染症拡大予防対策のため令和2年3月から一時中止の状況。	コロナ禍以前は、ドライブを兼ねて利用者の自宅の近くを通ったり、利用者が行きたいと希望があった場所に行っていた。ドライブや外食を毎月していたが、現在は実施していない。現在は、弁当やピザ、お好み焼きのテイクアウトを実施している。家族から事業所に電話があった場合は利用者に取り次ぐようにしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
23		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずにご利用者が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の相性を理解し、会話を楽しんでいただけるように座席位置を工夫している。フロアでは利用者同士が交流出来るよう家庭的な雰囲気の中での団らんの時間を設けている。		
24		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	利用終了後においても、必要に応じて家族からの相談に乗っており、本人や家族との関係性を大切にしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
25	(12)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	職員へは、日頃からコミュニケーションを大切にし、どんな些事なことであっても、本人からの要望はもちろん、困難な場合においても生活歴や状態を見極め本人の習慣や好みを分析し、何を望んでいるかを掘り下げ、それを具体化する努力をして欲しいと伝えている。	利用者に何かしたい事がないかを直接お聞きしたり、利用者家族の方に思いや意向をお聴きして取り組んでいる。コロナ禍以前は、スーパーや百貨店でフェアが開催されている時に、利用者の希望で外出したり、買い物を楽しんでもらう機会も提供していた。	
26		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	左記の項目は、入居前の聞き取りにて全て聞き取るようにしており、新たな疑問が発生した場合は、本人、ご家族に随時聞き取りを行なっている。		
27		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎日観察を行っており、現在の個々の能力に応じ、実施可能な家事をしていただけるよう支援を行なっている。		
28	(13)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人と家族より聞き取りを実施し、個別的ニーズを踏まえた計画を作成している。ケアカンファレンスにてスタッフ側での評価を行ない、家族や本人からの意向確認も行っている。概ね3ヶ月に1回のモニタリング、6ヶ月に1回の計画見直しを行なっている。	ケアプランのサービス内容は、実際に介護支援している内容が具体的に記入されている。アセスメントやケアプランの作成やモニタリングの作成は、計画作成担当者が作成をしている。ケアプランについては、利用者の身体状態等の変化にもよるが、6か月に1回更新をしている。現在は、コロナ禍であるため、サービス担当者会議の開催を控えている。そのため、利用者家族には電話でケアプランの内容等の確認を行っている。月1回の職員会議の際に、ケアプランの内容の検討されている。	ケアプランの中には、フォーマルサービスだけではなく、インフォーマルサービスや居宅療養管理指導等の事業所以外が提供する介護保険サービスも記載してはどうだろうか。
29		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の生活の中での記録や特徴的な言葉・行動・表情等を観察し、スタッフの気づきやアイデアをケアの改善に役立てられるよう、適宜スタッフ間でのカンファレンスを実施している。その結果をケアの実践と介護計画の見直しに繋げている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	外出レク等において、要望や柔軟な発想を持って外出先を決定し、実行している。新たなニーズが発生する度に、それを実現することを考えて、希望に応じたサービス等を実際にも実践していたが、新型コロナウイルス感染症拡大予防対策のため令和2年3月から一時中止の状況。		
31		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の小・中学校生との交流、子供神輿等の地域行事を施設に招くこと、各種ボランティアによる楽しみ作りを行っており、豊かな暮らしを送れるように配慮していたが、新型コロナウイルス感染症拡大予防対策のため令和2年3月から一時中止の状況。		
32	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人・家族の希望によるかかりつけ医に定期受診が出来るように支援・援助している。	事業所に入居した時点で利用者家族から嘱託医に主治医を変更したいとの希望がある事が多い。他科受診については、事業所職員が受診支援をしている。受診した内容は家族に報告をしている。夜間帯の対応は、まずは看護部長が対応し、必要に応じて嘱託医の指示を得て対応している。	
33		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	日常での利用者の状態変化が発生した場合、施設内の看護師への報告を行い、必要に応じて隣接クリニックとの速やかな連携を図り、必要な受診や投薬、処置がなされるよう援助している。		
34		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は当方からの介護・看護サマリーによる情報提供を行い、退院前は病院を職員が病院側からの情報を受けると同時に本人の状態の把握を行うよう努めている。		
35	(15)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した場合で、施設で出来るケアを受けながら施設での生活継続を希望された場合、あるいは看取りを希望された場合、早い段階から主治医を交えた家族の意思確認の場を設け、施設及び隣接クリニックで出来ること・出来ないことを説明し理解していただいている。その上で終末期のケアを実施している。	事業所として「重度化対応・終末ケア対応指針」を作成している。他にも「ターミナルケアマニュアル」を作成して、事業所と家族の中でターミナルケアについての確認を十分に実施している。看取り介護に関しては、同一敷地内にある提携医療機関や看護師と連携を図り、終末期のケアを実施している。コロナ禍ではあるが、看取り介護を実施している。	
36		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	教育委員会の勉強会のひとつとして、心肺蘇生法及びAED使用訓練の実践を伴う研修を年に一回、施設全体で実施していたが、新型コロナウイルス感染症拡大予防対策のため令和2年3月からは、映像とレポート形式にて実施。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協働体制を築いている	施設全体での避難訓練等を定期的実施している。近隣の協力者との関係を大切に、協働体制を築いていたが、新型コロナウイルス感染症拡大予防対策のため令和2年3月から一時中止の状況。	年2回、通報訓練と避難誘導訓練の部分訓練と消火や通報及び避難誘導訓練を連携して行う総合訓練を実施している。また、緊急時や災害時等に対応が出来る様に、救急蘇生法の研修も実施している。夜間想定訓練としては、近くの職員を参集するような訓練を実施している。	火災訓練や風水害訓練だけではなく、地震に対しての訓練も実施してはどうだろうか。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
38	(17)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入居者への羞恥心への配慮としては、衣類の着脱は必ず居室で行ない、声かけも本人や他の入居者へも配慮し”人として”を大切に支援している。	スピーチロックとなるような発言がないように、接遇研修を実施したり、業務の中で職員に指導をする等している。また、排便や排尿について職員同士での情報共有をする際には、利用者の名前を実名ではなくイニシャルで呼び、職員同士では排尿や排便の状況が確認でき、他利用者には分からないように配慮して、プライバシーの確保に努めている。	
39		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常生活のあらゆる場面で利用者の希望を適宜聞取っている。洋服を選ぶ場面等でも、自己決定を尊重し、ご自分で選べるように援助している。		
40		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	おおよその日課スケジュールはあるが、居室で過ごすことを好まれる方には、昼夜逆転や閉じこもりにならないように配慮した上で、その方の希望に沿った過ごし方をしていただけるように援助している。起床、就寝時刻も一人ひとりのリズムを大切にしている。		
41		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	入居前からの身だしなみ(化粧の習慣や衣服の好み)等を入居前に聞き取り、その習慣を継続出来るよう援助を行なっている。		
42	(18)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事の盛り付けは、職員と一緒に見守りながら、可能な利用者で行い、食後はゆったりとした会話の時間をもち、後片付けも出来るだけ手伝っていただき、利用者や職員のコミュニケーションとしても活かしている。ホットプレート等を用いて、お好み焼きや豆腐を使った梅ヶ枝餅やいろんなメニュー等を利用者と職員で調理することもあり、食事や空間を楽しむ工夫を行っていたが、新型コロナウイルス感染症拡大予防対策のため令和2年3月からは回数が激減している。	利用者の方が食事の盛り付けや、ご飯をよそう等している。茶碗洗いや茶碗拭きをする利用者もいる。食事は3食厨房で調理した食事が事業所に来て、事業所で取り分けている。3食の食事の提供以外にも、職員と一緒に菓子を作ったり料理を作ったりしている。食事形態としては、常食、1口大、刻み、ミキサー食を提供しており、利用者に向けた食事を提供している。	
43		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事摂取量、水分摂取量は常に把握しており、摂取量の減少が見られた際は、看護師に連絡し、速やかに主治医に連絡し指示を受けて、早期に対応を行なっている。食事や水分の摂取に介助が必要な場合は、必要な介助を実施している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後に利用者の能力に応じた口腔ケアを実施し、汚れや臭いが生じないように配慮している。		
45	(19)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	歩行が困難な方であっても、トイレでの座位が保てる方はトイレ誘導し、トイレで排泄が出来るように援助している。排泄パターンは職員が把握しており、排泄の間隔を見て、本人のサインを観察し、適時に誘導出来るようにしている。	プライバシーに配慮をしながら、排泄チェック表で排泄の間隔をつかんで、介助する様になっている。そのようにして失禁の回数が減ったり、利用者の状態によってはポータブルトイレを使用して自立して排泄出来ることもある。	
46		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	出来るだけ歩く機会や起立動作を取り入れ、腸の運動が活発になるようにしている。朝は牛乳を飲んでいただき、排便を促すようにしている。主治医との連携を取り、下剤や坐薬の処方、乳酸菌入りヨーグルトの提供等で援助をしている。		
47	(20)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	開放感のある浴室の窓の外には、竹の格子や玉砂利などが配置され、半露天風呂のような造りとなっている。入浴は概ね週3回としており、その方の現状に合わせて午前と午後を実施している。限られた人員と勤務時間の中ではあるが、一人ひとりのペースで入浴していただくことで満足できるように支援している。	週3回入浴支援をしている。半露天風呂で、まるで外で入浴をしているような開放感のある浴室である。浴槽のまたぎが難しい利用者で浴槽につかりたい利用者については、職員2人介助で入湯をされる事もある。入浴剤は何種類か準備しており、その都度使用している。柚子湯や菖蒲湯等の季節風呂を実施している。	
48		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人ひとりの体調や体力、臀部の皮膚の状態、下肢浮腫の状態等を観察し、無理なく快適に過ごしていただけるよう休息を取っていただく支援を行なっている。午睡の習慣のある方には、午睡が出来るよう支援している。		
49		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	職員は薬の目的や副作用を理解し、薬の情報を見て用法や用量を理解している。随時、看護師とも連携を取っているが、特に向精神薬の服用の際には副作用がADL低下に直結する為、観察と報告を密に行なっている。		
50		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	家事分担としては配膳準備や後片付け・拭き掃除・洗濯物たたみなど役割を担って、全体的なレクリエーションではゲーム・個別支援等、個人的には趣味や希望に合わせ、月刊テイ等を活用し、楽しみごとや気晴らしを支援していたが、新型コロナウイルス感染症拡大予防対策のため令和2年3月からレクリエーションの内容にも苦慮している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51	(21)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	法人の施設全体がオープンな空間となっており、日頃より自由に廊下で他サービスへ移動したり、天候の良い日は施設の中庭や周囲を散歩、近隣へのドライブや散策等を行なっている。月間計画のレクリエーションを計画し、季節の移り変わりが施設内だけでなく戸外でも感じられるように支援していたが、新型コロナウイルス感染症拡大予防対策のため令和2年3月から施設外の外出ができない状況下に苦慮している。	事業所内の敷地や中庭を職員と一緒に散歩をしている。現在は、コロナ禍で敷地外の外出は控えているが、コロナウイルスの感染状況によっては、外出をした事もある。正月には全利用者が初詣に行き、外出をされた。コロナ禍以前は、家族が頻繁に来られて外出をされたり、家族がお弁当を持って中庭で一緒に食べる等していた。	
52		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金を使うことは手段的日常生活動作の重要な一部であることを職員は理解しており、お出かけや買物外出レクでのお金を払っていただくことを支援していたが、新型コロナウイルス感染症拡大予防対策のため令和2年3月から一時中止し、施設内の売店等を活用している。		
53		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	手紙を書かれる利用者には手紙を書いていたかのような物品のセッティングをお勧めをしている。電話をかけたという希望があった場合は、事前にご家族の意向を確認した内容に沿って、ご本人に説明し、電話していただいている。		
54	(22)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節に応じた掲示を行い、視覚で季節感を味わい楽しんでいただけるように配慮している。必要以上に照明を明るくすることは避け、また昭和をイメージした内装・家具・物品の配置により家庭的な空間を作っており、居心地よく過ごせるよう支援している。テレビやBGMの音量も適切になるように配慮し状況や時間帯に合わせ、適切な選曲により、お好みの曲を流すよう配慮している。	共用空間にはテーブル、椅子、ソファ、テレビ2台、畳の部屋があり、障子を開けたら景色が良く、敷地内に咲いている梅、桜、つつじ等を鑑賞できる。また、季節に合った花をプランターで育てているので、共用空間から鑑賞する事が出来る。利用者が書いた習字の作品や季節に応じた飾りつけ(節分や正月、七夕、クリスマス等)をしている。床暖房があり、冬の時期は暖かく過ごす事が出来る。	
55		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	集団での生活だからといって、常に決まった席に座るわけではなく、思い思いに過ごせるように、ソファに座っていただいたり、一人での時間を過ごせるよう配慮している。		
56	(23)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室は一人ひとり個人の空間であることを認識していただく為、入り口にはネーム以外に顔写真と七福神+2つ(吉祥天、招福天)の神様の絵を部屋の番号として利用している。内部はベッド・エアコン・洗面所以外は家族や本人と相談し、馴染みの家具や物品、ご家族の写真等を掲げる事を行っている。	洗面台が各居室に設置しており、事業所として介護用ベッドや収納庫、エアコン、電灯を設置している。利用者によっては、家族写真や使い慣れた筆筒等を持ち込んでいる利用者もいる。	
57		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	日頃から、家事作業や行事における料理作り等に参加して頂いている。		